

(道徳)

「よりよい生き方を求める宮原っ子を育む道徳教育の創造」  
—他者と関わり、自己を見つめる児童をめざして—

大阪市立宮原小学校 四ッ谷一郎太  
山本 岳大  
政 知宏

### 1. 研究主題設定の理由

平成30年度からの「特別な教科 道徳」実施に向けて、本校では平成28年度から道徳を研究教科とし、研究テーマを「よりよい生き方を求める宮原っ子を育む道徳教育の創造 ～授業力の向上を目指す指導上の3つの工夫～」と設定して、取り組んだ。年間6回行った授業研究会では、大阪市小学校教育研究会道徳部の実践を踏まえて授業づくりを行った。毎回、「7つの工夫」(『学習指導要領解説・道徳編』[文部科学省]小学校編)から各学年が授業に合わせて3つの工夫を設定し、教材研究や教具の作成、展開の構成、児童のふり返しなど、教員の指導力の向上を図った。

第1年次の課題をふまえ、本年度は研究テーマを「よりよい生き方を求める宮原っ子を育む道徳教育の創造 ～他者と関わり、自己を見つめる児童をめざして～」と設定し、副題にあるように、児童の活動を研究の中心として取り組むことにした。児童が学級の友達と関わり合い、影響を与え合いながら道徳的価値の理解を深めるようにしていく。そして、それまでの自分を振り返ったり、自己に問いかけたりして、児童がよりよく生きていくことができるようになることをめざした。また、2年目にあたる今年度は、道徳科の評価についても研究し、その方法や内容について研修や研究を重ねることにした。

### 2. 研究の趣旨

本研究では、学級内のすべての児童が道徳的価値の理解を深め、それまでの自分を振り返ったり、自己に問いかけたりしてよりよく生きていくことができるようになることをめざす。道徳性を養っていくためには道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え自己の生き方についての考えを深めていく必要がある。つまり道徳的価値を一方的に押し付けるのではなく、児童自らが道徳的価値の意義や良さについて考え、そのことについて納得していくことが重要であるといえる。道徳的価値とは、社会の中でよりよく生きていくために必要なものであるため、自分一人の考えだけでなく、学級全体で納得できる答えを求めていく必要がある。そのため、学級内のどの友達の考えにも、道徳的価値の理解や、よりよく生きていくための手がかりがあると考え、自分一人では気づくことができなかった見方や考え方に気づくことができ、物事を多面的・多角的に考え、人間理解や他者理解を深めることができる。

平成30年度から「特別の教科 道徳」が始まり、それに伴い、指導要録や通知票に道徳科の評価を記載することになる。このことは、道徳科の評価の意義を再確認し、児童の学びのために積極的に行っていくよい機会となると考えた。このことから、児童の道徳性に係わる成長やよりよい生き方を求めていく姿を評価することで、児童の道徳性をより養っていけるといえる。すべての児童の道徳性を養っていくために、すべての児童の学習の状況を的確に評価することが必要であると考えた。

これらのことから、本研究ではすべての児童が道徳性を高めよりよく生きていこうとできるために、すべての児童が授業に参加することと、すべての児童の学習の状況を的確に評価することをめざす。

### 3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

- 本研究では、すべての児童が授業に参加できるようにするために、「授業のユニバーサルデザイン化モデル」という知見に着目して研究を進める。道徳授業のユニバーサル

デザインについて、焦点化、視覚化、共有化の3点を抑える必要があるとしている。そこで、これら3点に着目して授業デザインを行っていく。

#### 視点① 焦点化

道徳の教材には道徳的価値について様々な側面や関連価値があるため、児童の思考が様々な方向に向いてしまい、話合いが深まらない場合がある。そこで、ねらいや発問を焦点化し考える内容をシンプルにすることで、児童が何について考えたらいいか明確になり、話合いが深まり道徳的価値の理解も深まると考える。

#### 視点② 視覚化

登場人物の心情や児童の思考などは目に見えないため、話合いの焦点が曖昧になってしまう場合がある。そこで心情グラフや表情の絵、散布図などを使ったり、板書を構造的に表したりすることで登場人物の心情の変化や行動の理由なども考えやすくなったり、自分の意見や立場がはっきりしたりして話合いが深まると考える。

また、児童によってはただ教材を読むだけでは、状況や内容の把握がしづらい場合がある。そこで、場面絵や役割演技を用いることで、児童が状況把握したり状況を想像したりしやすくなると考える。

#### 視点③ 共有化

児童が一人で考えただけでは、その考えは自分だけの考えになり独り善がりなものになってしまう場合がある。そこで、話合い活動によって互いの考えを共有し、みんなが納得できる考えにたどり着くことができるようにする。そのために、ペアトークやグループトークを取り入れたり、話合いの際、児童の意見をそれぞれ関連づけたりしていく。

また、授業の最後の振り返りを共有することで、他の見方・考え方のよさに気づいたり、自分の見方・考え方のよさに気づいたりして、これからの自分に生かしていこうとする気持ちを高めることができると考える。

#### ○ すべての児童の学習の状況を的確に評価するために

大阪市教育研究会道徳部の研究をもとに、多様な方法で児童の道徳的価値についての理解の状態を把握することで、よりの確に児童の学期を通した道徳科の学習を評価することができる。そこで、「道徳ノート」の記述、「授業中の発言」「学期末の自分の振り返り」の3点から児童の学習の状況を見取っていくことにする。

### 4. 研究の成果と今後の課題

#### (1) 研究の成果

○ 学年ごとの研究授業とそれに伴う討議会や、道徳科についての研修会を通して、多くの実践にふれることができた。道徳科の授業において大切な、導入や展開の工夫、中心発問を考える視点、ワークシートのつくり方など教職員の研鑽を積むことができた。

○ 授業研究においては、ユニバーサルデザインの観点から①焦点化の工夫、②視覚化の工夫、③共有化の工夫の3つの視点を設定することで、研究を深めることができた。

①「考える道徳」をめざした教材研究から主発問を設定し、授業の焦点化を図ることで児童の思考が深まる授業展開ができた。②場面絵や登場人物などの掲示をすることで、子どもが何に焦点を当てて考えたらいいかわかり、話し合いが活発に行われて理解が深まった。③展開において場面理解のための動作化や心情理解を深めるためのロールプレイをしたり、多面的・多角的な思考を育むためのペアトークやグループトークを取り入れたりすることで、児童が意見を出し合って学級で考えを練り上げることができた。

○ 道徳科の研修と研究を重ね授業に活かすことで、教師が関心を持って指導にあたり、児童の学習活動の見取りも深まった。また、児童が書いた「授業のふりかえり」、指導者による「児童の授業中の発言（態度）」の見取り、児童が学期ごとの自分の成長をまとめる「学期末のふりかえり」の3点を蓄積することができた。

#### (2) 今後の課題

○ 道徳科の多岐にわたる内容項目に合わせた適切な教材分析ができるように、研鑽をしていく。

○ 道徳科の学習を通して多面的・多角的な見方へと発展し、児童が主体的・対話的で深い学びができる、「考える道徳」の指導法の工夫を重ねていく。

○ 「児童の授業中の発言（態度）」を見取るより有効な方法について、今後も検討を重ねていく。